

刑務所でニーズを重視した作業療法が展開できた一事例 —自閉症スペクトラム障害のある受刑者に対して—

足立一¹⁾、宇都みずき²⁾、川口真由²⁾

1) 高知リハビリテーション専門職大学、2) 播磨社会復帰促進センター

Key Word：刑務所、作業療法、発達障害

【はじめに】

現在、作業療法士を雇用する刑務所が徐々に増えてきた。今回、刑務所入所当初から無気力で生活面に介助を要した自閉症スペクトラム障害のある受刑者に対して作業療法を実施する機会を得た。刑務所という様々な規律がある環境下で、関連部署の協力を得ながら、本人のニーズを重視した作業療法が展開できた。本事例報告を通して、今後の刑務所での作業療法の実施に役立てていきたい。

【本刑務所と作業療法】

本刑務所は、官民協働による刑務所である。収容の対象は初犯の男性で、精神障害や知的障害のある受刑者に対しては特化ユニットが設けられ、障害特性に合わせた各種処遇を行う。また様々な規則もあり、例えば、刑務作業中に許可なく手を止めることや他受刑者と話すことなどは禁止されている。作業療法は医師の指示で刑務官や教育専門官の立会の下、プログラム内容に合わせた環境で実施する。対象は病状悪化や障害が重いため刑務所での生活や刑務作業が十分に行えない者が中心である。

【倫理的配慮】

本報告にあたっては、本人へ研究方法、研究協力の自由、プライバシーの保護、同意書について説明した上で、署名により同意書を交わした。また本刑務所長及び関連部署の許可を得ている。更に個人が特定できないように論旨に影響がない範囲で内容を一部改変して報告する。

【事例紹介】

A氏、男性、自閉症スペクトラム障害と知的障害。特別支援学校卒業後、飲酒とギャンブル中心の生活で、20歳頃から生活苦で窃盗を繰り返し、執行猶予刑で保護観察となる。その後も生活は改善されず、40歳代で実刑判決、X年-6月に本刑務所へ入所となる。入所当初から何事に対しても受身的で動作は不器用で緩慢なため、規則通りに行うことが難しく、介助を要していた。精神活動の活性化及びADL能力の向上を目的にX年に作業療法が指示された。

【作業療法経過】

I期：信頼関係の構築と内発的動機付けに努めた時期 X年～X年8月。初期検査結果は、簡易上肢機能検査(STEF)右63、左76。開眼片足立ち4秒。コース立方体組み合わせ検査IQ56.8。TMT-A294秒、B中断。無表情で質問には「わからない」と答えることが多かった。本人の希望は「パチンコがしたい」であった。刑務所内の生活では、整容や更衣動作、居室の掃除等が何度指導しても改善されず課題となっていた。しかし、何事も指示された通りに行動する本人のストレングスに注目し、作業療法では、週1回30分程度、動きを伴うデュアルタスク課題(脳トレ)を一緒に行い、前後に注意機能検査も行い、一時的な効果をフィードバックした。ある時、「考えるとすっきりする」と話すようになった。

II期：ストレス対処の学習へ取組んだ時期 X年8月～X+1年1月。毎回自分でできる脳トレを提案し、居室で試してもらった。A氏の取り組みには波はあったものの気に入った脳トレを実践するようになった。これを機に刑務所内で貸出し可能な書籍からクロスワードパズルや小説などを作業療法で紹介し、居室でできるストレス対処法を一緒に考える時間を設けた。居室で行う活動が増え、少しずつ表情も豊かになった。

III期：出所後の生活の準備へ取組んだ時期 X+1年1月～X+1年6月。この頃A氏から「一人暮らしがしたい」という希望が聞かれるようになり、衣服の片付けや居室の掃除などを作業療法で練習した。姿勢が悪く手順を理解できなかったため、モデルを提示しながら何度も練習を繰り返した。刑務所生活へ般化されるよう関連部署へ調整し、同じ環境と備品を使用した。結果、A氏の生活態度の変化を称賛する声かけも増えた。また母親へ「ありがとうと言いたい」と訴え、SSTも実施した。事件について振り返る時間を設けることもでき、「イライラしたらパチンコしかなかった」と振り返り、また集団での改善指導へも参加できた。グループホームで生活することが決まり、X+1年6月にした。心身機能の検査結果に大きな変化は認められなかったが、「一人暮らしがしたい」や「母親に感謝の気持ちを伝えたい」など、活動的で建設的なニーズへと変わった。

【考察】

今回はA氏の希望を引き出し、それを重視した作業療法であった。しかし、刑務所は施設的特性上、様々な規則があり、自由に作業ができる環境とは言い難い。今回の報告を通して、刑務所での作業療法は、受刑者の希望や刑期に合わせて、「刑務所生活への適応」と出所後の「福祉サービス下での生活」とを調整していくことが求められると考える。